　夢子には、夢があった。

　日頃オナニーのおかずにしている動画や漫画でよく見かけるシチュエーション。
『人妻がエアコンの修理業者とセックスする』。これを体験してみたかったのだ。

　一人暮らしを始めて数年。
　ワンルームのちいさな部屋。

　今年、とうとうエアコンが壊れた。

（チャンスが来てしまった…！）

　電話をしてみると運良く今週末の土曜日の昼頃に修理に来てくれると言う。
　どんな人が来てくれるかは分からないし、もちろん望み通りに事が進むなんて思っていない。あんなの本来ならアダルト動画でしか有り得ないシチュエーションなの

だから。
　それでもほんのちょっとの非日常なイベントに夢子はわくわくそわそわしながら週末を待った。

――そして当日。

「本日担当させて頂きます白鳥と申します。こちらメインで作業をします大城です」
「大城です。よろしくお願いします」

　差し出された名刺を受け取る。

　実際に修理の業者が来るとこれは現実なのだと実感して夢子は一気に居た堪れない気持ちになった。
　自分はただの客で、相手は仕事で来ていて。ただそれだけの当たり前の現実だ。
　相手を少しでも誘惑できればとノーブラノーパン、カップ付きのキャミソールにショートパンツというとんでもない薄っぺらい格好で対応している自分が死ぬほど恥ずかしくなる。
　しかも勝手に男性一人が来ると思っていたのだ。二人も来るとなると余計に惨めになってきた。

（性欲の暴走って恐ろしい…何考えてたんだろ。どっかのタイミングでちゃんと服着よ…）

　夢子はすぐにエアコンの元へ二人を案内し、できるだけ二人の視界に入らないよう後ろへ下がった。
　予め伝えてあったエアコンの型番と故障の状態など、二人は恐らくそれらがまとめて記載してある紙とにらめっこしながら作業を始めた。

――しかし、暑い。

　窓は開いているもののろくに風も通らない。
　エアコンが故障してから急いで買った小型の扇風機が微かに風を送っている程度だ。
　いつもは一人だから暑い暑いと言いながらもなんとかなったものの、狭い部屋に三人いるとなるとやはりそれだけでも部屋は室温が上がっているようだった。
　三人ともこめかみに流れるほど汗をかいてしまっている。

　夢子は二人に出していた麦茶のグラスを一旦回収し、新しく麦茶を入れ氷を多めに入れて再び差し出した。

（もしかしてこの格好で大丈夫だったかも。エアコンの効かない部屋なんだからこんな薄着しててもおかしくないし）

　作業が始まって一時間半ほど経った頃だろうか、
　あまりに自分の妄想とはかけ離れた光景に夢子がそんなことを思い始めたとき。

「作業自体は終了しました。これから試運転しますのでしばらくお待ちくださいね」

　そう言って白鳥が振り返った。

「あ、はい！ありがとうございます」
「窓も閉めておきますね」

　大城が丁寧な手つきで窓を閉め、エアコンが音を立てて動き出した。

「…あの、すみません」

　エアコンを見ていた白鳥が遠慮がちに振り返った。

「はい？」
「お手洗いをお借りしてもよろしいですか？」
「ああ、はい、こちらです」

　夢子が案内するため部屋から玄関側への扉を開けると暑いと思っていた部屋の中よりも更に暑かった。
　トイレは玄関のすぐそばにある。
　エアコンの効きを確かめるなら扉は閉めないといけないだろうと。
　夢子がその扉を閉めたときだった。

「…夢子さん、でしたっけ、名前。いつもこんなことしてるんですか？」

　白鳥にそう言われ、夢子の喉がひゅ、と鳴った。

「……へ、」
「来客があるたびにそんな格好して誘ってるんですか？そういう趣味？」
「え、あ……、えと、」

　玄関前のトイレとバスルームに続くだけの狭い空間。
　お互いに気を遣わなければ体が触れてしまうほどの空

間で、白鳥は夢子と向きあって自分より背の低い夢子を見下ろしている。
　その白鳥の手が、ためらいもなく夢子の胸元まで上がってきて人差し指が胸の先端を押した。

「下着も着けてないですよね」
「……っ！」

　ピンポイントに先端を触られ、夢子は胸を腕で隠して思わず逃げるようにしゃがみ込んだ。

　おかしい。
　こうなることを望んでいたはずだったのに。
　いざそういうシチュエーションになると頭が真っ白になって固まってしまう。

「あれ？違いました？触ってほしいんじゃないんですか？」

　白鳥は夢子を追うようにしゃがみ込んできて。
　胸を隠していた夢子の手首を掴みその手首を片手にまとめ夢子の頭上へ持ち上げる。
　そして無防備になった胸元へもう片方の手が伸びてきた。

「尖ってるじゃないですか、それとも乳首大きい？」
「……あッ」

　カップがずり上がってキャミソールの薄い布一枚越し、白鳥の指が乳首を引っ掛けた。
　人差し指の側面で乳首引っ掛け上げて、今度は撫でつけるように下ろす。そしてそれを往復される。
　布越しのその遠慮のない感触に夢子の乳首はすぐに勃起してしまった。布越しで見えなくてもすぐ乳首の位置がわかってしまう。

「こんな格好してどうしてほしいんですか？言ってみてくださいよ」
「…っ、あ、ん」

　白鳥は笑顔すら見せずただただ弄ぶように乳首をすりすりといじってくる。
　乳首を往復する指が先端を掠めるたび、夢子の体がビクついて。

　夢子は手首もまとめられているものの抵抗もせずその指を受け入れて、膝を擦り合わせた。

　さっきまでの恐怖に似た感情が快感で薄れていく。
　それどころか自分の夢見た通りの展開になるんじゃないかと、期待でむくむくと膨らむクリトリスが痛い。

　すり♡すり♡すり♡
　男の指が左右の乳首を行ったり来たりして刺激して。
「は、あ♡…っ、ん、ぅ」
　夢子は徐々に声を隠さなくなった。
　男に見下ろされ観察するように見つめられ、正直に息を吐く。
　すり♡すり♡すり♡
　夢子が抵抗しないのを見て、男は夢子の手を解放し空いた手も夢子のもう片方の乳首に伸びた。
　両の手で、両の乳首を擦り始める。
　すりすり♡すりすり♡
「あ…っ♡あぁっ♡…っん♡あ、ぁッ♡」
　すりすり♡すりすり♡
　乳首が根元から男の指に倒され♡こねられ♡
　ビリビリとした快感が夢子の体を走っていく♡

　夢子は腰をビクつかせ快感に浸り目を瞑った。と、白鳥は乳首から手を離してしまった。

「…、」

快感を取り上げられた夢子が白鳥を見上げる。
男の表情には相変わらず笑みもなく。家に来たときの愛想などなくなっていた。
まっすぐ夢子を見ている。その突き刺さるような視線に夢子の目が泳ぐ。

「夢子さん、どうしてほしいんですか？」
「……、な、」
「ほら」
「…っ！♡」
一瞬だけ乳首を引っ掻いてまた離れる。
「どうしてほしいか言わないともうこれはお終いです」

さっきまで性欲の暴走は恐ろしいなんて思っていた夢子だが、今はその性欲に従うしかなかった。

「や、やめないで…、乳首、してくださ―――あ゛ぅっ♡♡♡」

夢子が言い終わる前に。

ぐりぐりぐりぐり…♡

白鳥は夢子の乳首を親指と人差し指で挟んでぐりぐり

とこねた♡

　ぐりぐりぐりぐり♡
「はっ♡あぁっ♡」
「こらこら、暴れないで」
　ぐりぐりぐりぐり♡
　いきなりの無遠慮な責めに夢子の体が暴れてしまう♡
「やっやめっ♡やめ、て♡あ゛っ♡」
「してください、って言ったじゃないですか」
　ぐりぐりぐりぐり♡
　白鳥は相変わらず涼しい顔をして、
　夢子の胸の先端をこねくり回している♡
「強い、強いんです…！こんなっ♡あぁッ♡」
「わがままだなぁ、じゃあこうですか？」
　カリカリカリカリ♡
　今度は爪の先で乳首を下から掻きあげた♡
　さっきまでの強い責めから解放された乳首が、
　その細かな刺激を敏感に感じ取ってしまう♡
　カリカリカリカリ♡
「あ゛っ♡あぁッ♡♡あ、んっ♡♡あ…ッ♡♡」
　夢子の全身が跳ねる♡
　乳首から電流のようにビリビリと体中へ気持ちいいのが駆け抜けていく♡

　白鳥はすりすりと擦り合わせている夢子の膝を見て言った。

「乳首だけでいいんですか？もっと気持ちよくなれるところあるんでしょう？」

　夢子は顔を見られたら伝わってしまいそうで俯いた。
　相変わらず乳首はカリカリ♡すりすり♡と爪で擦られ、体は勝手にビクついてしまうけれど。
　ここから先を求めたらもう後には引けない。

「触ってあげますよ、言ってくれれば」
「さ、わって、ください…」

　それでも夢子はねだらずにはいられなかった。

「ちゃんと言って、どこを？どうして欲しいですか？俺の目見て」
「…っ、く、クリ、擦って、ほしいです」

　目の前の、初めて会う男にイかされたかった。

　白鳥の手がショートパンツの裾から侵入してきた。
　焦らすようにゆっくり、指先で夢子の太ももをくすぐ

りながら進んでくる。

「こっちも履いてなかったんですね…痴女じゃないですか」

　その指が少しずつ中心へ近づいてきて。
　夢子は「ふー♡ふー♡」と息を荒げてショートパンツ越しに動く白鳥の指に釘付けになった。
　散々乳首をいじられて熱くなってしまったそこをやっと触ってもらえる。

「はは、熱がこもってほかほかしてる。触っちゃいますね、ああ、割れ目からも溢れるくらいもう濡れてる…」
「…ふっ♡あ♡」
「ぬるぬるだ、乳首だけでこんなになっちゃったんですか？」

　閉じたマン肉の割れ目を指でなぞり上げて、それと同時に夢子の愛液が塗りひろげられていく。
　白鳥は片手で夢子の足を開かせ、閉じていたところを開かせると、

　ぬるっ♡

　白鳥の指がぬるついたそこを指で優しくなぞって♡
　それから

　ぬちゅっ♡

　愛液を纏った指先がクリトリスの皮の側面から撫でた♡

　ぬちゅっ♡ぬりゅっ♡ぬちゅぬちゅ♡
　ちゅくちゅくちゅく♡

　一度触れてしまえばまた遠慮はない♡
　白鳥の指が愛液を纏ってクリトリスの皮をあちこちから摩擦する♡

　ちゅく♡ちゅく♡
　ぬりゅぬりゅ♡ぬちゅっぬちゅっ♡

「はっ♡あっ♡あ♡…っ♡あ、ぁ…♡」

　根元から掬いあげるように撫でたかと思えば、円を描くようにクリトリスの外を回る♡
　夢子の気持ちいいやり方を探っているようだった♡
　片手はまた乳首に伸びてやわやわと揉み込んでくる♡

　きゅ♡きゅ♡きゅー…♡
　ぬりゅぬりゅ♡ぬちゅ♡ちゅ、ちゅくっ♡♡

「あ、う…っ♡♡んっ♡んんッ♡…ッ♡♡は、ん…♡♡」
「ほんと気持ちよさそうな顔しますね…触りがいあります」

　きゅ♡きゅう♡きゅっ♡
　ちゅくちゅくちゅく…♡ぬりゅぬりゅぬりゅ♡♡

　愛液を塗り広げるようにクリトリス全体へ広げられ♡
　摩擦するそこは燃えそうなほど熱を帯びていく♡
　その熱が乳首への刺激をも増幅させてしまっていた♡

　きゅう♡きゅう…っ♡きゅー♡♡
　ぬるっぬりゅ♡♡ぬりゅぬりゅ♡♡ちゅくちゅくちゅく…♡♡

「…っ♡♡あ、あ…ッ♡♡や、だめ…っ」
「何がダメなんです？」

　白鳥が夢子の髪へ頬擦りするかのように顔を寄せた♡

　吐息が耳にかかりそうなほど近寄ってきた男の体に、夢子はますます興奮してしまう♡

「そこ、クリ、それされるのだめ♡もう…、」

　ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅ…♡♡

　夢子のその言葉に、白鳥はクリトリスを擦っていた指の動きを規則的なものに変えた♡
　夢子を追い詰めようとしている♡
　側面からくるくる♡と射精促進するように先端に向かって円を描いた♡それを何度も何度も繰り返し♡

　ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅ…♡♡

「だめっ♡だめ…！♡」
「いいですよ、イっちゃいましょう。夢子さんこうしたかったんでしょ」

　ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅ…♡♡

　白鳥の指にも力が入る♡
　クリトリスを軽く押し潰し、ドクドクと脈打つそこをまた更に押し潰すようにしつこく円を描きながら擦る♡

「…っ♡♡だめ、イきそ…♡♡♡」

　夢子は白鳥の腕を掴んでバタバタと動いていた足に力を込めた♡
　そのイくために体を強張らせる夢子を見て白鳥はろくに表情を崩さずただただ夢子を責めた♡
　目の前で初対面の女が自分の指で堕ちようとしている♡

　ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅ…♡♡
　きゅううううっ♡♡きゅううううっ♡♡

「やだぁ♡♡も、イく、イく……っっ♡♡」

　縋るように掴んでいる白鳥の手に指が食い込むほど、夢子は目の前の絶頂へ昇っていった♡
　あと少し♡もう少しでイける♡最高に気持ちいい瞬間♡

――そのとき。

「……白鳥さん？」

　部屋のドアを開いた。
　ひんやりとした空気と共に大城がそこから顔を覗かせた。
　その顔が信じられないものを見て蒼白になる。

「し、白鳥さん！？何やってるんですか！？」

　白鳥は大城に見つかっても手は離さなかった。
　勃起した乳首に添えられた手と、ショートパンツの中へ突っ込まれている手。
　大城から見れば白鳥が夢子を襲っているように見えるだろう。
　夢子は顔があげられなかった。大城の顔を見られない。
　白鳥の腕を掴んだまま、ドク、ドクと心臓がものすごい早さで血液を押し出している音が耳に響く。

「あー、ごめん大城、ひとりで任せちゃって」
「い、いや、何、どういう状況ですかこれ…、えぇ？」
「お客様に誘われたら断れないっしょ」
「……え？」

　夢子はますます顔が上げられない。

　大城だって夢子の薄着に不信感は抱いていただろう。
　白鳥にそう言われてしまってはこの状況は完全に夢子のせいだ。

「ほら夢子さん、大城のことも誘わなきゃ」
「…！」
「言って、『二人がかりで私のことイかせてください』って」
「な…、」
「『二人のちんぽ欲しいです』って言いなよ」
「……！！」

　現実に引き戻されていた夢子の頭が、また欲で埋まっていく。
　断る理由なんかない。
　自分が憧れていた夢のようなシチュエーションが現実に起ころうとしているのだから。

　夢子は戸惑い引き攣る大城の顔を見上げ言った。

「ふ、二人のちんぽでイかせてほしいです、私とセックスしてください…！」

「…あっ♡あ、あぁっ♡はっ♡あッ♡あぁッ♡…ッ♡ぅあ♡」

　エアコンの試運転のため最低温度で設定された冷たい風が行き渡って、部屋は寒いくらいだった。
　その狭い部屋の狭いベッドの上。

　裸になった夢子は男二人に挟まれて乳首を愛撫されていた♡

　れろ…♡れろ♡れろ、れろ♡れろ〜…♡れろっ♡
　大城は柔らかな舌で乳首をゆっくりと擦り♡
　ぢゅ……っぽ♡ぢゅっぽ♡ぢゅ…っっ♡っぽ♡ぢゅぽっぢゅぽっ♡
　白鳥は乳輪ごと吸い上げる♡

「……ッ♡♡あ、ぅっ♡♡あっ♡あっ♡あッ♡」

　両方の乳首から走る快感に夢子は二人の体で両側から挟まれたままビクビクと体を震わせた♡

　れろ♡れろ…♡♡れろれろれろ♡

　ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡ぢゅ…っっ♡♡ぢゅ…っぽ♡♡

　ざらついた舌が唾液を纏って薄い乳首の皮膚を擦る感触と、
　遠慮なく吸い上げられ伸ばされて、頂点で解放される感触に堪らなくなる♡

「ほらな、喜んでるだろこの人」
「…まあ、そうですね」
「あっ♡あ…ッ♡あぁ、あッ♡♡」
「さっき途中で終わっちゃいましたから、ちゃんとクリ触ってあげますよ」

　乳首に唇を当てたまま、白鳥の指が胸の辺りから夢子の皮膚を滑っていく♡
　くすぐるように爪を立てチリチリとした感触を与えながら、その指はゆっくりと下へ降りていって♡
　夢子はぎゅっと目を閉じてその感覚に集中した♡
　いじられる乳首とその指に神経を尖らせ、細やかな刺激を追う♡

　ぬる…♡

　そこへ辿り着いた指先が皮をなぞった♡

「…っ♡」

　ぬる♡
　ぬる♡

　ぬるついている皮の上からそこを摩擦される♡

　ぬる♡ぬりゅ♡

「…あっ♡あ、は♡はぁ♡」

　じんわり熱くなって♡
　それがもっと欲しくて♡
　少しの快感も逃したくなくて腰だけはしっかりと動かず、けれど足はシーツに皺を作っている♡

　ぬりゅ♡ぬるっぬるっ♡♡
　ぬりゅ…♡♡

　乳首からの刺激とクリトリスから広がる気持ちよさで夢子の顔が歪んでいく♡
　さっき寸止めされたそこは一気に火がついたように快

感が増幅してしまっていた♡
　優しくただ滑って摩擦されるだけではもう足りないのだ♡

「お、お願いします、そこ♡ちゃんと触って…♡」
「どこを、どうするんですか？ちゃんと言えるでしょう」

　相変わらず白鳥は涼しい顔をして夢子を見下ろしている♡
　その顔を、今日初めて会った男なのに触れそうなほどの距離で夢子は見上げた♡

「クリ、触って…♡直接触ってほしいです♡」
「……」

　向かい側で大城の喉がごくりと鳴ったのが聞こえた♡
　白鳥は欲情したその顔を見下ろし表情を崩さないまま…、けれど親指と中指がクリトリスのすぐ側の薄い皮膚に触れた♡

「あ…♡あ…、♡」

　その二本の指が夢子の皮膚を押さえつけたまま左右に

開く♡
　そしてそこへ人差し指が触れて♡

　ちゅく♡♡

「……ッ！♡♡」

　皮を剥かれたクリトリスを一撫でした♡♡
　途端に夢子の体がピン♡と突っ張る♡♡
　力がこもった足とふるふる震える腰など構うこともなく、また白鳥の指先がクリトリスを撫でて♡
　今度は少し圧迫した状態でクリトリスを上下した♡

　ちゅく♡ちゅく♡
　ひんやりとした空気に触れるクリトリスが♡
　人差し指のほんのわずかな先で撫でられて♡
「はっ♡あッ♡アッ♡」
　ちゅく♡ちゅこっ♡ちゅこ♡
　一気に充血して真っ赤になったその粒が更にパンパンに張っていく♡
「あ゛っ♡♡ああっ♡あッ♡あ゛…ッ♡♡」
　たまらなくなってのけぞって声を出す夢子の胸の先端を、
　二人は逃がさないというように覆い被さって吸い上げ

た♡♡
　ちゅく♡ちゅこちゅこ♡ちゅく♡
　れろれろ♡♡ちゅうっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡
　びくっ♡びくっびくっ♡
　夢子の体が悦んで跳ねる♡

「はっあ♡♡あっあ♡あッ♡♡…あッ♡♡あ、あッ♡♡」

　白鳥の指で擦られてそこから気持ちいい感覚が燃え広がるように体を侵食していく♡♡
　侵食して乳首で増幅して♡♡

　ちゅこちゅこ♡♡ちゅく♡ちゅく♡
　れろれろれろ…♡♡れろ♡れろ♡

「……夢子さんイきそうですか？」

　白鳥の指が更に圧迫する力を強めた♡
　快感で膨らんだクリトリスは擦られながらその指に弾かれている♡

「い、いきそう、です…♡♡きもちいい…！♡♡」

　夢子のその宣言に、クリトリスを弄んでいた白鳥の指は夢子をイかせるための動きに変わった♡
　追い詰めるように一定のリズムで擦り始める♡
　その摩擦で熱いのか夢子の体温で熱いのか、もうわからないほどクリトリスを責め立てた♡♡

　ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ…♡♡

「あ゛ッ♡♡あぁっ♡あ、はァッ♡♡あ゛ぁっ♡♡やああっ♡♡」

　ピンポイントにクリトリスの先を擦られる♡
　自分でもわかる、その気持ちよさにその奥の入り口までもがくぽくぽと開いては閉じてを繰り返すほど♡
　体が快感に浸っていく♡♡

　ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ…♡♡

「あ゛ぁ、あっ♡♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡いくっ♡いくいく♡」
「乳首もちゃんと感じててくださいね」
「あ゛……ッッッ！♡♡だめっ♡♡いく♡♡……

ぅ゛、んッッッ！！♡♡♡」

　イく寸前♡
　白鳥にきつく乳首を吸い上げられ♡

　夢子は白鳥と大城に挟まれ絶頂した♡

「はは、まだ体ピクピクしてますね」
「…っ♡ふ、ん♡……んっ♡」

　余韻で下腹部が疼く♡
　イったばかりなのにその疼きだけでまた感覚が蘇ってきてしまう♡

「ほんとに、気持ちよさそうですね…」

　最初こそ控え目だった大城は顔を赤く染めていまや息を荒げている♡
　余韻のままに体を震わせる夢子の胸から手も離さない♡

「お前、先に挿れる？俺は後でもいーよ」
「えっ」

「めっちゃ勃ってんじゃん」

　体を起こした白鳥に背後から体を抱えられた♡
　白鳥の足の間に体を埋め胸にそのままもたれる♡
　背後から抱きしめてくれた手はそのまま胸をやわやわと揉んで感触を楽しんでいるようだった♡

「夢子さんもちんぽ欲しいんですもんねえ？ほら、もっかいおねだりしてみて」
「……っ♡う、あっ♡」

　白鳥の指がときどき乳首に触れて言葉がうまく紡げない♡
　それなのに白鳥はその夢子を嗜めるように、きゅーっと指で乳首を挟んだ♡

「うあ゛っっ♡♡…あ゛っ♡♡やあっ♡♡」
「ほらあ、何が欲しいんですか？ぐちょぐちょのおまんこに何が欲しい？」
「あっ♡あ゛ッ♡ち、ちんぽ♡♡大城さん、の、ちんぽ欲しいです…！♡♡」

　ぐりぐりと挟まれた乳首がこねられ、その状態で夢子は必死に目の前の大城へ訴える♡

　大城は不安と期待の入り混じった表情で、けれどすぐに着ていた作業服を脱ぎ始めた♡
　充分に勃起しているのが服の上からでも分かっていたのにそれでも下着から溢れでるように現れたそのたくましいちんぽに、夢子は釘付けになってしまった♡
　興奮しているのが夢子にも伝わってくる♡
　張った亀頭と血管の浮く幹、反り返った勃起しきったちんぽはその夢子の視線にぴくっと動いた♡

「い、いいんですよね…？」
「いい♡いいです、挿れてください♡」
「ほらほら、完全に合意だから。てかどっちかっていうと俺ら夢子さんに誘われてるから。三人でセックス楽しんじゃおう」
「そう…ですよね」

　大城が白鳥の胸に受け止められている夢子へ覆い被さるように近づいて♡
　優しく腰を掴んで位置を調整すると亀頭をぬるつく入り口へ当てた♡

　ぬちょ♡ぬちゅ♡

　濡れた音をさせてそこへ塗りつけるように上下させ♡

　そしてゆっくりと押し入れた♡

　ぬ、ちゅ♡
　ぐちゅちゅ♡

「は、あぁ……っっ♡♡♡」

　太く硬いちんぽが体の中へ侵入してくる♡
　慣らされてもいなかったまんこを押し開くように♡

　ぐぷ♡ぬちゅ♡
　ぬちゅ…♡

「あ…♡♡あ、ぁ♡♡ぅ、ん…っ♡」

　開かれたそこへ勃起したちんぽが埋められると密着しているそこからじわじわと波のように快感が広がっていって♡
　夢子は眉を八の字に下げその感触に震えた♡

「はは、夢子さん本当に気持ちよさそう、まだ挿れたばっかなのに」
「ふ、う♡……っ♡♡ん♡♡」
「乳首も一緒にしてあげましょうねー…」

「っあ゛♡♡あッう♡♡う゛、ん…ん゛ッッ♡♡♡」

　後ろから震える夢子を抱き止めていた白鳥の指が、また乳首をぐりぐりとこね始めた♡

「うわ…すっごい締まる」
「あ、…っ♡♡奥、当たって…♡♡あ、ぁん♡♡」

　乳首をこねられ悶える夢子の腰に大城の腰が密着した♡
　と同時に、大きなものが夢子の奥に蓋をするように到達したのを感じた♡
　そこに当てられるとなんだか粗相をしてしまいそうな、チリチリとした感触がお腹に広がる♡
　乳首への刺激でナカを締めてしまうのが自分でも分かる♡そしてその収縮のせいで自ら気持ちよくなってしまうのだった♡

「ごめんなさい、動きますね」

　ずろろ♡♡
「は、あ…ッ♡♡♡」
　その大城の言葉を合図に、
　太い幹が夢子の壁を引きずるように戻っていって♡

　ぐちゅっ♡
「ああぁっっ♡♡♡」
　またすぐ奥へ戻ってきた♡
　ずろろ…♡♡
　ぐちゅちゅっ♡♡
　ずろろ…♡♡
　ぐちゅちゅっ♡♡
「あっあぁっ♡♡♡あッ♡アッ♡♡」
　ずろろ…♡♡
　ぐちゅちゅっ♡♡
　引いて戻って♡引いて戻って♡
　ぐちょぐちょに濡れた中をゆっくり摩擦される♡
「念願のちんぽでしょうけど、ちんぽだけに集中されると嫉妬しちゃいますよ」
　こりこりこりこり…♡♡
「っああぁ♡♡♡やっアッ♡♡あぁっ♡♡」
　ちんぽに浸っていた夢子の意識を戻すように、
　白鳥は乳首をさっきよりも力をこめてこねた♡♡

　ずろろ…♡♡ぐちゅちゅっ♡♡
　ずろろ…♡♡ぐちゅちゅっ♡♡
　こりこりこりこりこり…♡♡

「あ゛ぁ、んッッ♡♡♡あっ♡あっ♡あっは、ぁッ♡♡

♡」

　膣壁を擦られ奥へ硬いチン先を当てられ♡
　乳首は両方とも指でこねくり回される♡♡
　夢子は白鳥の胸にもたれ気持ちよさの余り体をくねくねと捩らせた♡♡

「や、ばい、ナカすっごく気持ちいいです」
「動いて、動いてください♡もっと♡突いて…♡」

　じわじわと迫る快感に、夢子はもっと気持ちよくなるためにねだった♡
　腰をゆるゆると動かす大城をまっすぐに見上げその腕を掴む♡

「…こう、ですか？」

　その夢子に煽られる大城は夢子の腰を掴み直し自らの膝の上に乗せると、

　ぐんっ♡

　とちんぽを突き入れた♡♡
　浅いところから深いところの壁をえぐりながら、腰を

そらす夢子のまんこへ突き上げるように♡♡

「……ッッッ！！♡♡♡」

　今まで当たっていなかったところを強くえぐられ擦られて夢子は声にならない声をあげた♡
　乱暴なまでの快感が襲ってくる♡

　ぬこっぬこっぬこっぬこっぬこっ♡♡

「っあー…これ、気持ちいいです、夢子さんのおまんこ気持ちいい」
「……ッッ♡♡♡ぁっ♡♡は、ぁっ♡♡あ゛ッ♡♡」

　大城はその状態で小刻みに腰を前後に揺すった♡♡
　ナカの気持ちいいところをえぐられたまま硬いちんぽが揺れている♡♡
　閉じようとする壁を乱暴に揺すられる感触がたまらなく気持ちいい♡♡

　ぬこっぬこっぬこっぬこっぬこっ♡♡
　こりこりこりこりこりこりこり…♡♡

「あッ♡♡…ッッ♡♡あ、うぅ♡♡あぁあッ♡♡あっ♡

あっ♡あッ♡あ、ぁッ♡♡」
「…どうですか夢子さん、乳首とまんこ、気持ちいい？」

　後ろから白鳥がこめかみに頬擦りをしながら聞いてくる♡
　その手は夢子の乳首を執拗にこねくり回したままだ♡

　ぬこっぬこっぬこっぬこっぬこっ♡♡
　こりこりこりこりこりこりこり…♡♡

「いいっ♡♡いいですっ、気持ちいいです…！♡♡乳首もまんこも♡♡気持ちいいっ♡♡」
「…大城、俺もちんぽ突っ込みたい、交代してよ」
「そうですね…俺もそろそろ限界ですし。じゃあ、ごめんなさい、ラストいきますね」

　そう言った大城が、

　ぬこぬこぬこぬこぬこぬこぬこ！！！♡♡♡

　と、彼の雰囲気からは想像もできない力で自らの腰と夢子の腰を揺さぶり始めた♡♡

「やっ、あ゛ぁあ゛ッッ！！♡♡♡あ、あ゛……ッッ！♡♡♡あっ♡♡♡ア゛っ♡♡あっあ゛ッッ♡♡♡」

　ラストスパートと告げた通り、力強く突き上げる腰と、掴んだ夢子の腰もそれに合わせて動かされる♡♡

　ぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こっっ！！！♡♡♡

　絶頂が近いのだろう、大城の動きはだんだんと余裕がなくなっていって、
　奥に亀頭が当てられそのまま子宮全体を振動させられるような動きに変わった♡♡

「やだ…ぁ、アッあっ！♡♡これだめっ♡♡だめだめだめ…！♡♡♡いっちゃう…ぅ！！♡♡♡」

　夢子の下腹部に、引き攣るように力が入る♡
　大城は強い快感を恐れるような夢子の表情に舌舐めずりをすると、また更にちんぽを膨らませ♡♡

　ぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こっっ！！！♡♡♡
　ぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こぬ゛こっっ！

！！♡♡♡

　ただただお互いが気持ちよく絶頂するために腰を振った♡♡

「いくっ♡♡いくっいくっ♡♡きもちいっ♡♡いく…！！♡♡♡」

　足を限界まで開き、こねられる乳首は白鳥に晒して♡

「い゛、く……ッッッ！！！♡♡♡」
「あー…出る、」

　夢子は激しく体を痙攣させて絶頂した♡
　その夢子へ大城は何度か体をぶつけて、
　中へ吐精したのだった…♡

「夢子さん分かってると思うけど次俺にヤらせてくださいね」

　ずるりと大城のちんぽが出ていって体の力を抜きだらんと呆けている夢子を、白鳥は四つん這いの姿勢にさせた♡
　大城のほうへ顔を向かせシーツに手と膝をつかせる♡
　まだ息の整わない夢子はされるがままにその姿勢を取り背後で白鳥がベルトを外す金属の音を聴いた♡

　また、ちんぽが入ってくる♡
　これぞ夢にまで見た別の男のちんぽが連続で挿入される瞬間だ♡
　正直イったばかりで気持ちよくなれる自信はない、もしかしたら苦しく感じるだけかもしれない…、

　でもそんな心配はすぐに消えた♡

「一気に突っ込んじゃっていいですよね」

　どちゅ…っ♡♡

「……う゛、んんっ♡♡♡」

　白鳥が夢子の腰を掴んですぐに♡
　硬いちんぽが一気に奥まで入ってきてその衝撃で思わ

ず夢子の体が崩れた♡

　どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ…♡

　絶頂して萎んでいたまんこが無理やり広げられる♡
　それが夢子を快楽へ引きずりこんでいく♡

　どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ…♡

　あんなに涼しげな顔をしていた白鳥のちんぽがバキバキに勃起していることに夢子も興奮していた♡
　自分で欲情しているという事実がくすぐったい♡

「どうです？俺のちんぽ、ちゃんと気持ちいいですか？」
「…っ♡きもち、いいです♡ちんぽきもちいい…♡♡」

　背後からする声は相変わらず涼しいのに、まんこを往復しているちんぽは熱くて♡
　夢子は顔をシーツに押し付け、押し上げられるままに声を上げた♡

「あ、う゛っ♡♡う♡ん゛っ♡♡ん、ん゛ッ♡♡ぅ♡♡ふ、ぅ゛ッ♡♡」

　どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ…♡

　規則正しく膣壁を擦ってくるちんぽに気持ちよさが増幅していく♡
　イったばかりで敏感すぎるほど研ぎ澄まされているまんこがちんぽの熱に反応してしまう♡♡

「夢子さん、」

　揺さぶられるままシーツに押しつけていた夢子の頭を、前にいた大城が撫でた♡
　促されるままに体を起こすとその大城の手が夢子の胸の下に潜りこんできて♡

「もっと気持ちよくしてあげますね」

　その手は後ろから突かれてぶるぶると揺れる乳首をきゅっ♡と摘んだ♡♡

「ふっう゛ぅ…ッッッ！♡♡♡」

　きゅっ♡きゅっ♡
　きゅうっ♡

　揺れるのを制御するように摘んで下へ引っ張られる♡♡
　乳輪も乳首も、薄い皮膚が伸びてちんぽの振動で揺らされ快感に変わる♡♡

　どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡
　きゅっ♡きゅうっ♡きゅうっ♡きゅう〜…っ♡

「あぁあ゛ぁッッ♡♡あ、ぅ゛♡♡だめ♡♡それだめっ♡♡乳首♡♡だめ…っ♡♡♡」

　ビリビリと電流のような快感が走って、それが背筋から脳へ響いて♡
　夢子はあまりの快感に髪を振り乱し頭を振った♡そうしないと耐えられないほどの強い快感だった♡

「えっろ…、」

　乱れる夢子を背後から見下ろしていた白鳥が呟いて♡
　腰を掴み直し更に奥へとちんぽを押しこむ♡
　硬いそれは夢子の体を前へと押し出してしまうけれど、白鳥は夢子の体へ背中から抱きつきそれを引き戻した♡

　どれだけ強く突かれても、白鳥に抱き込まれた体と大城に摘まれている乳首で夢子の自由はない♡

　どちゅっどちゅっどちゅっどちゅっどちゅっ♡♡
　きゅうっ♡♡きゅっ♡きゅっ♡きゅう…♡♡

「はッあ゛っ♡♡あっ♡♡あ゛ァッ♡♡あっ♡♡あッ♡♡はっ♡あ゛ぁあ♡♡♡」

　スピードをあげた白鳥の腰♡
　大城のちんぽとは絶妙に違う場所をえぐってくる♡
　それが二人の男とセックスしていることを自覚させられる♡♡

　どちゅっどちゅっどちゅっどちゅっどちゅっ♡♡
　きゅっ♡♡きゅうっ♡きゅっ♡きゅ…っ♡♡

「はっ♡♡あ゛ッ♡い、いいっ♡気持ちいいっ♡♡また、乳首もおまんこも♡気持ちいい…！♡♡♡」

　このまま気持ちいいのが増幅していってまたイけそうだった♡
　そう思って素直に口にした夢子に抱きついていた白鳥の手が、夢子の下腹部へ伸びた♡

「ここも、一緒に気持ちよくなりましょうか」
「あ゛……ッッッ！！！♡♡♡」

　クリトリスを皮ごと挟み込まれたのだ♡♡

　しこしこしこしこしこ♡♡

　そのまま、まるでちんぽをしごくみたいに上下に擦られ♡

「やっあ゛…！♡♡あっあ゛ッックリ、だめ…！♡♡♡そん、な゛っ♡♡あ゛ァ…ッッ！！♡♡♡」

　乳首とまんこだけでもいっぱいいっぱいだったのに更に性感帯を刺激され、夢子の手はもう自分の体を支えきれなかった♡
　しかしそれも白鳥に抱えこまれている♡

「ここ、好きでしょ？皮かぶったまま勃起してるじゃないですか」
　しこしこしこ…♡♡♡
　どちゅどちゅどちゅ♡♡
　白鳥はクリトリスをしごきながら器用に夢子のまんこ

へピストンしている♡♡
「す、すきぃ…♡♡すきだから、だめ♡♡♡よすぎ、て…♡♡だめだめ♡♡」
　抱えこまれたまま快感のあまり背中を丸める夢子を、
　きゅううぅぅっ♡♡♡きゅっ♡♡きゅうっ♡♡
「全部、気持ちよくなってくださいね」
　大城が乳首を引っ張ってその背中を反らす♡♡
「あ゛ッ♡♡あっ♡♡だめ、だめ…♡♡これやばいいぃ…！♡♡やばい、から…ぁ♡♡♡」

　しこしこしこしこしこしこしこ♡♡♡
　どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ♡♡♡
　きゅううぅ♡♡きゅううっ♡♡きゅううううう♡♡

　白鳥の腕の中で、夢子の体が震え出した♡♡
　痛いくらいの力で抱きしめられ、それにすら感じてしまって♡♡

「やだ、ぁ♡♡♡またいくっ♡♡いっちゃう…っ！！♡♡いく、いく、いく！♡♡」

　しこしこしこしこしこしこしこ♡♡♡
　どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ♡♡♡
　きゅううっ♡♡きゅうっ♡♡きゅうううぅぅ…♡♡

　白鳥の腰が小刻みに奥を叩きつけ、
　仕上げにクリトリスをぎゅううっっ♡♡♡と締め上げられて♡♡

「ぁ、いくっ♡♡♡いくのっ♡♡♡いくっ♡♡♡いくっ♡♡♡いく…ッッッ！！！♡♡♡」

　夢子は白鳥の腕の中でまた絶頂を迎えた♡

「はー…♡はー…♡はー…♡♡」

　そのまま夢子はうつ伏せで倒れ込む。

　とんでもない経験をしてしまった。
　憧れのシチュエーション、しかも相手は二人、乱暴なことをされるわけでもなく(乱暴な快感ではあったが)、ただただ気持ちよくされただけ…、
　いま起こったことを思い返し、絶頂後で冷えていく頭が状況を振り返ろうとしていた。

　しかし♡

「…もう一回、いけますか？」

　大城がそう口にして、夢子がその返事を口にする前にうつ伏せの夢子に跨ってきたのだ♡
　お尻にちんぽを擦りつけている♡
　既に勃起して硬くなっているものがお尻の割れ目を滑っている♡

「…え、あの…、」

　体を起こそうとした夢子の背を優しく押し返し夢子の体をシーツに押し付け♡

「いけますかって言うか、ごめんなさい、俺が我慢できないんで…」

　優しい声音とは裏腹に、その勃起ちんぽはお尻の割れ目を辿ってぐちょぐちょに濡れたまんこに強い力で押し入ってきた♡

　ぐぽっ♡ぬ゛、ぽっ♡♡

「……っ、う゛♡♡♡」

　うつ伏せの狭いそこに力任せに入ってきて、大城はすぐに腰を動かし始めた♡

　ばこっ♡ばこっ♡ばこっ♡

「……っ♡うっ♡ん゛んッ♡♡あ゛っ♡♡」

　上から叩きつけるように動く腰に夢子の体はベッドへ縫いつけられる♡
　これはこれで逃げ場がない♡
　二人がイって終わりだと思っていたセックスに無理やり引き戻されてしまった♡

　ばこっ♡ばこっ♡ばこっ♡

「ふっ♡ん゛っ♡ぅ、ん゛♡」

　硬いちんぽでシーツへ押され、シーツに押し付けられた下腹部はクリトリスが圧迫され…、それがまたじわじわと夢子を蝕んでいく♡
　ピストンと同じリズムでクリトリスが圧迫されているのだ♡

ばこっ♡ばこっ♡ばこっ♡
ばこっ♡ばこっ♡ばこっ♡

「あ゛っ、あ〜……っ♡♡♡あっ♡あ゛っ♡♡あ゛っう゛♡♡」

■サンプルはここまでとなります。